10月20日（日）

令和七年度　神道・宗教特別選考（Ⅰ期）入学試験問題

神道文化学部

# 小論文

―注意事項―

1　問題は4ページ、解答用紙は1枚である。
2　解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
3　試験時間は90分である。

L14A

**問一**（神道特別選考受験者のみ解答すること）

次の文章を読み、二〇〇字程度でまとめたうえで、神社の森が維持されてきた理由や背景について、自分の考えを八〇〇字程度で述べ、全体で一〇〇〇字程度となるように記しなさい。

鎮守の森は神の棲む森で、ここで毎年祭りが続けられてきた。文部省唱歌「村祭り」（明治四十五年）を聞いてみよう。

村の鎮守の　神様の　今日はめでたい　御祭日（おまつりび）
どんどんひゃらら　どんひゃらら　どんどんひゃらら　どんひゃらら
朝から聞こえる　笛太鼓
年も豊作　満作で　村は総出の大祭
どんどんひゃらら　どんひゃらら　どんどんひゃらら　どんひゃらら
夜まで賑う　宮の森

心が浮き立つようなリズムで、豊作を感謝する喜びにあふれている。毎年、祭りが近づくと笛・太鼓の稽古が始まり、祭り当番の準備も怠りなく、当日は村総出のお祝いで夜遅くまで賑う。

神輿や山車が宮の森から引き出されて、村や町を巡行する。氏子地域を巡って、神様の恵みや力を直接に分け与える。そして神主や町や村の大人たちにより厳粛な神事が執り行われる。町や村の自治・繁栄に責任を持つ人々が心身を清め真剣に神に祈り、豊作に感謝する。祭りは毎年欠かさず行われるところに意義がある。そのため鎮守の森は常に清らかに保たれてきた。初めは清らかな祭りの庭のみがあったのだと思うが、やがて仮設の社殿が設けられ、常設社殿へと発展した。

台風や梅雨、豪雪といった日本独特の風土の中で、鎮守の森を清らかに保ち、社殿を常宮（とこみや）の静宮（しずみや）と維持して行くのは相当な努力を要する。多くの人が心を寄せてきたからこそ維持できた森といえるのである。

現在、神社は約八万社ある。明治時代までは約二十万社あったといわれる。幕末まで神社の境内地、神領は特別に保護されてきた。江戸幕府の「神社条目」という法令では神領の一切の売買を禁止、質に入れることも不可としている。江戸期を通じて制度的に鎮守の森は守られてきた

のである。

明治維新後、神社の所有地はすべて国有地となる。よって自由な処分は不可能であった。ただ明治三十三年以降、政府内務省神社局は維持困難な小規模神社の統廃合を推進する。国や地方公共団体が神饌幣帛料を供進するに足る威厳ある神社の体裁を追求したからである。しかも合祀後の跡地は無償で譲与するとしたので、統合が進むことになる。官主導で神社合祀政策が推進され、和歌山県・三重県ではとくに強力に推進された。ただ地方の対応はまちまちで、全く行わない県もあった。

この神社合祀策に反対したのが植物学者の南方熊楠や民俗学者の柳田国男であった。鎮守の森がたくさんの生物・微生物の宝庫であり、民間芸能が伝承される場であるという理由からであった。鎮守の森の破壊は、信仰の破壊にもつながる。合祀策は反対運動の高まりを受けて、沙汰止みとなる。しかし神社数は十二万社に減少した。官僚主導の政策の影の部分である。

戦後、神社は国家管理を離れて宗教法人となる。宗教法人となった神社数が約八万社である。ＧＨＱの占領政策で神社は国家から強制分離され、国家との関わりを断たれ、神道に関するあらゆる象徴、日本神話は公教育の中から排除された。紀元節の廃止もそのひとつである。ただ国有地となっていた神社所有地は、特別立法により一定の手続きで神社に戻された。

ここで新たな問題が生じる。法人の判断で境内地の処分が可能となるからである。そこで全国神社の包括法人である神社本庁の規則で自由に処分ができない仕組みを作っている。神社人の叡智といえる。ただ現実には、戦後の急激な都市化や開発の中で鉄道や生活道路網の整備のために、神社境内地が処分された。公共性の高い事業は承認せざるを得ないからだ。鎮守の森が削られ、本来の形を維持できなくなったところもあると思われる。開発や利便性よりも鎮守の森が必要との国民合意がなければ、この流れは止めることができない。

神話の時代から現代にもたらされたのが鎮守の森である。古木が生い茂り、高木、低木、下草がバランスよく生え、たくさんの鳥、昆虫、微生物などが生きる空間で、生態系豊かな森である。森の中には清らかな庭があり、社殿があって毎年祭りが行われてきた。ここで神々の声に耳を傾け、神意を汲んで私たちの先祖は慎ましく勤勉に生きてきた。かけがえのない鎮守の森を、経済を最優先に破壊してしまう愚を避けねばならない。鎮守の森の声に真剣に耳を傾ける必要があるのではないだろうか。

（茂木貞純氏の文章に基づく）

**問二**（宗教特別選考受験者のみ解答すること）

次の文章を読み、内容を三〇〇字程度に要約したうえで、本論で述べられている日本人の宗教認識について、具体例を交えながら自分の考えを七〇〇字程度で述べなさい（全体で一〇〇〇字程度）。

「宗教に対する感覚」ということで、面白い話があります。私の友人で臨済宗のお坊さんが檀家さんを連れてヨーロッパのある国にいった時のことです。たまたま入国手続きの際に、係官が「あなたの宗教は何ですか」と聞いてきたというんです。友人は臨済宗の坊さんだから「仏教徒だ」と答えた。ところが、檀家総代さんが同じ質問をされると、こともあろうに「無宗教です」と答えてしまった。お寺のお坊さんと一緒に外国までやってきて、宗教は何かと聞かれて無宗教と答えてしまう。この不用意さというか、間抜けさというか、思わず笑いたくなる場面なのですが、条件反射でそういう答えがすぐに出てしまうところがそもそも日本人なのかもしれません。

友人の話に戻りますと、無宗教という答えを聞いた係官はそういう人間は入国させるわけにはいかないといったのだそうです。せっかくここまできて、住職と檀家が生き別れになったら大変だと思ったその友人は、瞬間的に言い訳を考えついた。「今、彼は無宗教といったけれども、それは宗教がないという意味ではない。日本には無の宗教という宗教があるのだ」。それで何となくことなきをえて、入国することができたといっていました。冗談みたいな話ですけれども、彼の言い訳として考えついた「無という宗教」は言い得て妙だと私は感心したのです。

先程、日本のマスコミの最前線で働いている人たちに「宗教は何か」と聞いて、「無神論」という答えをもらったことを話しましたが、彼らにしても「無宗教」と答えたつもりだったのでしょう。少なくとも欧米でいわれるような「確信的な無神論者」と思っていたわけではないはずです。それにしても、漠然としてではあれ、なぜ日本人は人に問われると「無宗教」「無神論者」と答えてしまうのでしょうか。その原因について、ここでは二つのことを申し上げます。

第一にそれは、明治以降の日本人の生き方に深い関係があると私は思います。明治国家は日本を近代化するために西洋文明を取り入れて、富国強兵・殖産興業という文明開化路線をまっすぐに突き進みました。ヨーロッパの近代文明はキリスト教と切っても切れない関係がありますから、その文明を取り入れる以上、キリスト教を受け入れるのは自然なことだったはずです。しかし、当時の指導者たちはキリスト教の根本的な精神を受け入れることは回避しました。けれども、それにもかかわらず、キリスト教的なものの考え方は水が流れ入るように日本に入ってきた。ここで注意していただきたいのは、入ってきたのは「キリスト教の信仰」ではなく、「キリスト教的な考え方」だったという点です。

そのキリスト教的なものの考え方の中で一番大きな問題が、宗教に対する考え方だったと私は考えています。どういうことかと申しますと、

キリスト教世界で「あなたの宗教は何ですか」と問うことは、キリスト教徒であるか、ユダヤ教徒であるか、あるいはイスラム教徒であるかを問うことです。一神教世界ですから、キリスト教徒であると同時にユダヤ教徒であるということはあり得ない。ただ一つの宗教を主体的に選びとることが一神教世界における宗教に対する基本的な態度であり、そこに一神教的な信仰の本当のあり方があります。つまり、「あれか、これか」なのであって、どちらかを選択しなければならない。それが西洋近代における宗教に対する根本的な立場です。

第二が、日本の伝統的な宗教、あるいは宗教心というのはそのような二者択一によるのではなく、「あれも、これも」という対し方だったということです。仏と神を同時に信仰してきたのが伝統的な日本人であり、正月には初詣に神社へお参りし、人が亡くなって葬式をする時にはお寺でやる。家にいくと神棚があり、仏壇が飾ってある。そもそも「宗教」とか「信仰」という言葉は日本にはなかったのであり、明治以前の日本人には意識もされなかったことでした。我々はそういう生き方を神信心、仏信心で済ましてきたのです。

しかし、明治になって「宗教」「信仰」という一神教の色彩で染めあげられた言葉をキリスト教から借りて使用するようになった。その結果、その時代の日本人はキリスト教徒でないにもかかわらず、自分自身の内面をキリスト教徒のまなざしで眺めようとした。つまり、本当の宗教というのは「あれか、これか」の宗教、一つを選びとる宗教だと考えるようになった。これはこれで大変なことだったと思います。なぜならその結果、それまでの日本の伝統的な宗教、すなわち「あれも、これも」の宗教を、迷信とか俗信とかあるいは低次元の宗教と考えるようになってしまったからです。

といっても、むろん日本人は「あれも、これも」の信仰を捨てませんでした。家には神棚と仏壇を祀り、信者でなくても平気でキリスト教会で結婚式をやってきたのです。「あれか、これか」という宗教の建前を受け入れながら、しかし他方で、その実態を覆いかくしてきたといえるかもしれません。ところがそのうちに、一つの信仰を主体的に選びとって自分の宗教にしてはいないという意識が強くなり、いつのまにか「そもそも自分には信仰がないのかもしれない」というふうに解釈して反省するようになり、「お前の宗教は何か」と尋ねられると、つい条件反射のように「無神論者である」と答えるようになった、というのが私の考えです。

（山折哲雄氏「日本人の「心」の原型」に基づく）